

23 四国八十八箇所お遍路報告書

写真・文 後藤隆徳

年月日 2013年04月05日(金)～11日(木)

回数 第六回・四国お遍路(通算歩行日数=28日～33日)

参加者 後藤隆徳、高岡八千代、土屋弥生、陶山節子、山口五月、渡辺典子、鈴木新平、鈴木綾子、田内保子、陶山泰信(ランニング)=9名+1名

巡礼寺

四十四番札所 大寶寺(たいほうじ) 愛媛県上浮穴郡久万高原町菅生二番耕地1173
ご本尊=十一面観世音菩薩 おん まか きゃろにきゃ そわか
メモ=昔から足摺岬の金剛福寺に次ぐ約80kmの長い旅路で、札掛、下板場、鴫田の三つの大きな峠を越えるもっとも苦しい道中。札所もちょうど半分。遍路にとってまさに峠の寺でもある。久万という老女が大師と出会い、その名が地名となった久万町は、海拔490mの高地にあり、大宝寺の境内は、樹齢数100年の杉や桧の老樹が林立し、幽寂な空気がただよう。寺は大宝元年(701)に、百済の僧がこの地に草庵を結び十一面観世音を安置したのがはじまりで、後に開削当時の年号にちなみ、大宝寺として創建され、やがて弘法大師が霊場に定めた。

保元年間に後白河法皇が、元禄年間に住持の雲秀法師がそれぞれ再興し、現存の本堂は大正14年の再建。寛保や天明の農民一揆の時など、藩主や農民からの信頼はあつく、また寺の権威も高く、そのころ十二坊を有し、隆盛をきわめた。昭和59年に大師堂が新築建立された。宿坊で出る心の籠った精進料理は評判がよい。

四十五番札所 岩屋寺(いわやじ) 愛媛県上浮穴郡久万高原町七鳥1468
ご本尊=不動明王 のうまくさんまんだ ばざら だん せんだ
まかろしゃだ そわたや うんたらた かんまん

メモ=弘仁6年、弘法大師がこの地を訪れた時、怪岩奇峰の深山に、不思議な神通力をもった法華仙人と称する女がいた。この女は大師に帰依し、一山を献じて大往生をとげた。

そこで大師は不動明王の木像と石像の2体を刻まれ、木像は本堂へ、石像は山に封じこめ、山そのものをご本尊不動明王として護摩修法された。そして寺号を海岸山岩屋寺と名づけた。それ以来修行の霊地として法灯は継承され現存の本堂は昭和2年の再建。この山には7種の霊鳥が住んでいたことから古くより七鳥という地名で呼ばれている。

山麓から六百m急勾配の参道を登る。道中行倒れの遍路の墓もある。本堂は巨大な岩石におおわれている。岩そのものは凝灰岩だがこれが50あまり、それぞれ空にそびえ、山容は奇怪そのもの。いずれも名称があり本堂左右の岩山は胎蔵界峰、金剛界峰とよばれ、大師の行場は「迫割禅定」と称する岩山。山頂には白山権現がまつられている。平成19年、1920年再建の大

師堂が国の重要文化財に指定された

四十六番札所 浄瑠璃寺（じょうるりじ） 愛媛県松山市浄瑠璃町282

ご本尊＝薬師如来 おん ころころ せん だり まとうぎ そわか
メモ＝三坂峠(海拔710m)は、「三坂越えれば吹雪がかかり、戻りやつま子が泣きかかる」とうたわれたほど、馬子泣かせの峠で、土佐街道最大の難所であった。久万の町から国道を登り坂で、三坂峠を越え途中の塩ガ森より旧へんろ道を下ると浄瑠璃寺の門前へ出る。道中松山城や瀬戸内海が遠望できる。歩きお遍路様は峠から旧道を下り丹波を経て浄瑠璃寺に至る。寺の境内は天然記念物の伊吹柏楨が生い茂り、本堂前には仏足石がまつられている。本堂は天明五年（1785）の再建。ご本尊は行基菩薩が刻まれた薬師如来寺の創建は和銅元年（708）。薬師如来の別名瑠璃光如来から寺号を浄瑠璃寺と名付けた。後にこの寺を再興した堯音は、社会事業家としても知られ、寺の復興後は托鉢の日々をすごしその浄財で岩屋寺から松山へいたる土佐街道の8カ所に橋をかけ、松山寄りの立花橋は大水のたびに流出していた。岩国の錦帯橋の構造を研究し、架橋に成功している。いまでも立花橋の近くに堯音の供養塔が立っている。石段の登り口に正岡子規の句碑がある。

四十七番札所 八坂寺（やさかじ） 愛媛県松山市浄瑠璃町八坂773

ご本尊＝阿弥陀如来 おん ありみたてい せんから うん
メモ＝当山の歴史は古く、大和時代から約1300年余りも続く古刹であり、お大師さまがお生まれになられる、100数10年ほど前に修験道の開祖、役の行者小角（神変大菩薩）によって開かれました。八坂寺の寺号はますます栄えるを意味する「いやさか（八坂）」に由来し、大宝元年に第42代文武天皇の勅願寺として小千伊予守玉興公が、七堂伽藍を建立するにあたり、大堂山（現在は大友山）に八ヶ所の坂道を切り開いて寺を創建したからとも言われている。

又、都の朝廷とも関係深く、勅使の出入りの盛んな寺でもあり、弘仁6年、お大師さまが八十八ヶ所の霊場に定められた。その後は、修験道の根本道場として栄え、紀州から熊野権現の分霊を移して十二社権現と共にお祀りして、山号を熊野山とし「熊野山八坂寺」と呼ばれるようになった。当山は修験道場のため開基以来、住職は代々八坂家の世襲であり、今に至る。

四十八番札所 西林寺（さいりんじ） 愛媛県松山市高井町1007

ご本尊＝十一面観世音菩薩 おん まか きゃろにきゃ そわか
メモ＝松山方面に向かって約5^{キロ}ほど行くと田園の中に西林寺がある。川の土手より低い所に寺があることから、罪ある者が門を入ると無間地獄に落ちると遍路はよび、関所寺といっている。前を流れる内川の附近には「ていれぎ」という草が自生し、市の天然記念物に指定されている。本堂は、元禄四年（1701）の再建。縁起によれば聖武天皇の勅願によって天平13年、（741）行基菩薩が徳威の里に堂宇を建立し、一宮別当寺として開創した。

大同2年(807)には弘法大師は現在地に寺を移し、十一面観世音菩薩を刻んで本尊として安置した。

また、大師は大旱魃に悩む村民を救済するため、杖を所々に突いて清水の湧水脈を発見し、村民をうるおした。寺の西南にある「杖の淵」はその遺跡という。

寺の周囲のいたるところに小川が流れている。「お大師さまのお陰で水だけは不自由しない」と地元の人々は杖の淵に修行大師像を奉安し感謝している。

四十九番札所 浄土寺(じょうどじ) 愛媛県松山市鷹子町1198

ご本尊=釈迦如来 のうまくさんまんだ ぼだなん ばく

メモ=西林寺から約3.3kmほど歩くと空也谷というところがある。山裾の静かなところだがこれは村人が空也上人を慕ってつけた地名でここに浄土寺がある。空也上人はやせて腰のまがった身に鹿の皮を裘にしまとい、杖をつき鉦をたたきながら行脚し、念仏の一言一言が小さな仏になって口から出ている姿をされている。天徳(957~60)のころ、上人が四国へ渡って浄土寺に三年間とどまり民衆の教化に励まれた。浄土寺にある上人像は、上人がこの地を去るにあたって、村人がお姿だけでも留められるようにと懇願したので、自像を刻んで残したといわれる。

大正11年建立の仁王門を入れれば正面に寄棟造りの本堂がある。本尊は行基菩薩作の釈迦如来。寺は天平年間に開創され、孝謙天皇の勅願所であった。後に弘法大師が巡錫し、伽藍を再興している。現存の本堂は文明14年(1482)領主河野通宣の再建で国の重文。本尊厨子と空也上人像も重文に指定されている。

五十番札所 繁多寺(はんたじ) 愛媛県松山市畑寺町32

ご本尊=薬師如来 おん ころころ せん だり まとうぎ そわか

メモ=この付近は松山市の郊外で、人家も多く道ゆく人との出逢も多い。空也谷から八幡神社を経て、なだらかな坂を登ると、右手淡路山の中腹に山門が見えてくる。門を入れれば正面に本堂、右に大師堂、左に聖天堂、庫裡がある。ご本尊は薬師如来。寺の開基である行基菩薩の作で孝謙天皇の勅願所であった。

その後、伊予入道頼義や堯運によって再興され、光明寺と号したが、弘法大師が長く留まって東山繁多寺に改称した。時宗の開祖である一遍上人もこの寺にとどまって学問修行したと伝えられる。

上人はその後「捨聖」として遊行し、正応元年(1288)亡父如仏の追善のために三部経を繁多寺へ奉納している。応永元年(1394)には京都・泉涌寺26世快翁師が後小松天皇の命で繁多寺第七世の住職となり、それより高僧が相継いで住職となったが、天和のころ龍湖という名僧が出て徳川家の帰依を得ることとなり、四代将軍家綱の念持仏三体の一つである歡喜天を案じた。

五十一番札所 石手寺（いしてじ） 愛媛県松山市石手2-9-21

ご本尊＝薬師如来 おん ころころ せん だり まとうぎ そわか
メモ＝四国観光のメッカだけに道後の湯治客もまじって賑わい、門前には名物の草餅を売る店が並び繁昌している。仁王門までの回郎は絵馬堂になって句や連歌、能役者などの名前を書いた額が納められている。
縁起によれば、道後湯築城主河野息利の妻が男児を生んだが、その子は生後3年たっても左の手がひらかず、安養寺の住職が祈祷したら手をひらき、「衛門三郎再来」の小石がころげ落ちた。その子は息方と名づけられ15歳で家督を継いだ。この子こそ天長8年10月、十二番焼山寺の山中で亡くなった衛門三郎の生まれかわりなのである。
やがて安養寺を石手寺に改め、この石は寺に納められた。寺の草創は聖武天皇の神亀五年（七二八）伊予大守越智玉純が勅を奉して鎮護国家の道場として伽藍を建立し、安養寺と名づけたことにはじまる。ご本尊の薬師如来は天平元年（729）行基菩薩の開眼。現存の本堂、三重塔、仁王門、鐘楼堂などは鎌倉末期の再建。

五十二番札所 太山寺（たいさんじ）愛媛県松山市太山寺町1730

ご本尊＝十一面観世音菩薩 おん まか きゃろにきゃ そわか
メモ＝太山寺への途中に道後温泉がある。万葉集に「伊予湯」とあるように古くから霊泉として知られ遍路もこの霊泉で旅の疲れをいやす。
松山は四国一の人口を有する県都。人々で賑わう市街を抜けて西へ向かう。寺は瀧雲山の中腹にあり、高浜港と背中合わせになっている。仁王門からは杉の大樹が並び、登り坂の参道に本坊や、遍路宿の面影をとどめる民家があり、急な石段を登り山門を入ると、正面に嘉元3年（1305）再建の本堂（国宝）がある。
用命天皇の2年、豊後の国の真野という長者が、大阪へ向かう途中、高浜沖で難破しようとした。ところが信仰していた十一面観世音に救われたので、報恩のため一寺を創建し、その尊像を安置した。後に聖武天皇をはじめとする歴代天皇の勅願で十一面観音像を奉安している七躰が重要文化財。境内には開基の真野長者をまつる長者堂があり、毎年四月第3日曜日に長者の供養が営まれる。

五十三番札所 円明寺（えんみょうじ）愛媛県松山市和気町1-182

ご本尊＝阿弥陀如来 おん ありみたていせい から うん
メモ＝四国遍路に関心の深かったアメリカのスタール博士は大正13年に八十八カ所を巡拝するが、円明寺の本尊厨子に打ちつけてあった銅板の納札を高く評価した。以来円明寺は納札のある寺として知れわたり、スタール博士は「お札博士」といわれた。この納札は慶安3年（1650）京都の住人家次が巡拝中打ちつけたもので、遍路の歴史を知る上で貴重な資料といえる。厨子内に安置されているご本尊は、行基菩薩作の阿弥陀如来。天平勝宝元年

(749) 聖武天皇の勅願により、和氣西山の海岸に創建され、寛永10年(1633)現在地に再興された。

松山の郊外とはいえ、民家に囲まれた町なかの寺。山門、楼(中)門、本堂、大師堂、観音堂が狭い境内に建ち並ぶ。河野家の遺臣たちの追善供養のために建立された観音堂には十一面観音像が奉安されている。境内の片隅にマリアの像を浮き彫りにした石塔があり、キリシタン禁制の名残をとどめている。

第1日目 04月05日(金・晴) 通算歩行日数=28日 歩行距離=9Km
清水町4:00-ヨ-カ堂前4:10-下土狩駅4:15-なめり駅4:20-
竹沢種苗店4:20-東名-浜名湖SA-大津SA-松山道-石鎚山SA13:
28-大州北只IC14:41-大州「うめたこ旅館」17:04(泊)

前回最終地の松山自動車道・大州北只ICに無事着いた。今回も前回同様、大津までD観光社長・T氏の世話になった。四国お遍路も前回からアプローチが少しずつ減っていくので楽になった。

時間があつたので少し稼ぐ。大州北只ICから北上する。大州神社から旧街道に入る。懐かしい家並みが続いていた。話好きのオバさん達が話しかけて来る。この間、「鶴瓶さんがTVで来た」といった。

町には徳島方面で見られなかった「ワラビ」が売っていた。肱川橋(ひじかわ)を渡る。大きな川で岸には屋形船が沢山係留してあつた。夏に花火を見るそうだ。左手に城が見えた。大洲城だった。橋を渡った信号の先が変わつたお遍路さんを見た。何と「乳母車」みたいな小型四輪車にブルーシートを被せて歩いていた。家財道具一切を積んでいるような感じ。いわゆる「遍路乞食」?

R56を行くと左手にJR予讃線が1車両走っていった。先に1200余年前、弘法大師が泊まった有名な「十夜ヶ橋(とよがはし)」と永徳寺があつた。橋の下に行ってみると祠・六地藏・焼香台・布団などと共に、弘法大師が横になっている(仰向けでなく)石像があつた。大師の横向きは珍しいものと思った。

橋を辞し今日の宿「うめたこ旅館」に向かう。交差点に土佐文旦・デコポンなどを販売している店があつた。何とそこが「お食事処・うめたこ本店」で、ちょっと先が旅館だった。デコポンなどを沢山いただき、女将に案内され宿に向かう。最初から気になっていた旅館名「うめたこ」の意味は、「うめ」と「たこ」は食い合わせが悪く「当たる」で、宿名をそれにあやかつたそうだ。(笑い)

旅館は大きく立派。お風呂はちょっと塩味?だった。料理はまあまあ。全体的には安く(6500円)良い宿だった。「うめたこ旅館」忘れられない名称だ。

こじき遍路=他人の善意やお接待を当てにして、然も、それが当然のごとくに振舞う「心のさもしい遍路」を指す。受けたお接待を自慢げにブログに載せたりするお遍路もここに属す。残念ながら、心のさもしい遍路は周りの方々への施しや自らお接待する気持などを持ち合わ

せていない。遍路修業とはほど遠い寂しい方々です。こじき遍路に堕ちないようにご注意ください。・・・ネット



商店街のオバサン



大洲城と肱川



乳母車お遍路さん



十夜ヶ橋



うめたこ旅館女将

第2日目 04月06日(土・雨のち晴) 通算歩行日数=29日 歩行距離=約28Km
起床5:00-出発6:40-内子旧街道-大江健三郎生家11:05-道の駅
「小田の郷」かじか昼食11:50~12:20-なみへい食品14:40-
鴛田峠(ひわた)遍路道落合地先16:00-「ふじや旅館」17:00(泊)
宿「ふじや旅館」お遍路=7000円、ドライバー=6500円
弁当=500円。旧館は、かなり歴史的な建物。夜、食堂が寒かった

朝、雨が降っていた。雨具を着け宿からR56に行く。五十崎(いかざき)から内子の先まで旧道が続いている。

私の携帯に富士市のSAちゃんから電話があった。Sちゃんの携帯が開いていないので、こちらに掛けたらしい。朝の携帯で緊張が走った。電話後、Sちゃんに聞いたら「囲碁仲間が昨日急逝した」という。一昨日出てくる時、碁を打ったばかりだそう。ご冥福を祈るしかない。

ここで、川崎市の単独の中年お遍路男性と前後した。内子町の旧道は美しい街並みが続いていた。作家大江健三郎の生家があった。「明智」という表札があった。

木で作った鹿と猪の面白い造り物があった。若い綺麗な女性が一人でやっている? 床屋があった。店名は「ミッチー館」だった。

程なくお昼なので食堂を探したが、辺りに無かった。少し遠いが内子町役場がある道の駅「小田の郷」に行き、うどん屋「かじか」に入る。変わった「たらいうどん」を食べた。小ぶりのタライ状の器に温かいうどんが泳いでいた。汁はソバ風で底に大豆が沈んでいた。



たらいうどん





なみへい食堂



サッパリとして美味しかった。

午後は内子から小田川沿いのR379に入る。雨は小降りになって来た。道は突合で新真弓トンネルを潜るR380と鴛田峠（ひわた）を越えるR379に分かれる。

後者に行く。四十四番札所・大寶寺まで21.5Kmの案内があった。道は、グッと田舎道になる。

しばらく歩くと「セルフうどん・なみへい食堂」があった。既に終了の看板だったが、トイレを借りて出てくると、主人とおぼしき方が「こい、こい」と手招きしている。これも何かの縁と行ってみると、お茶・饅頭のお接待だった。

ちょっと寒い日だったので温かいお茶が有難かった。可愛い孫を抱いた、なみへいさん？はご満悦だった。ご馳走様でした。

道は薬師堂前を通過しトンネルを潜り、落合で田渡川沿いに入って行く。道が細くなってバスはギリギリだった。16:00、この先で今日は終了した。

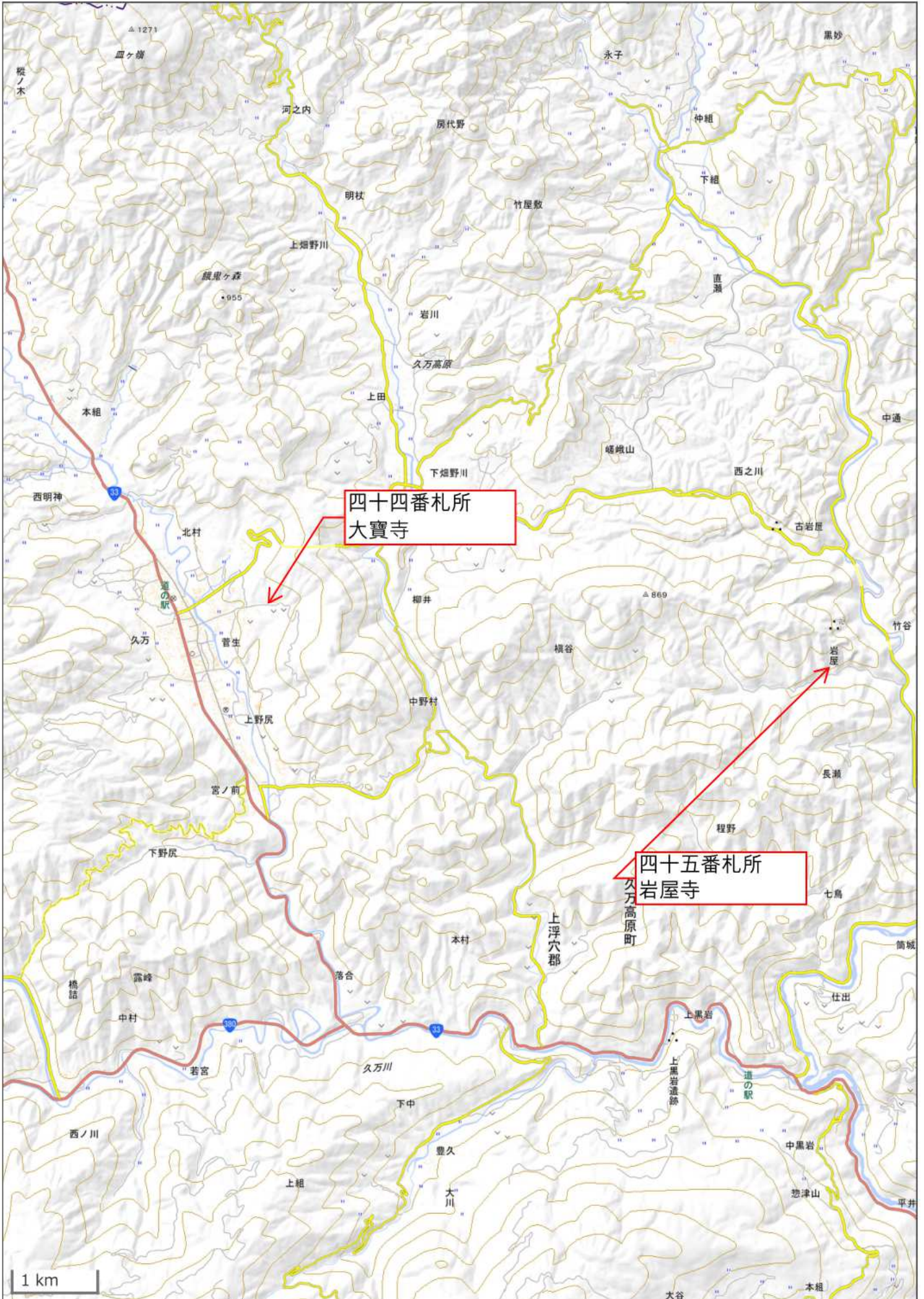
第3日目 04月07日（日・雨のち曇・雪のち晴） 通算歩行日数=30日 歩行距離
=約20Km

起床5:30ーバス宿発6:45ーお遍路開始7:05ー下坂場峠（標高570m）8:20ー鴛田峠（ひわた）9:30ー四十四番札所・大寶寺12:10～45ー国民宿舎「古岩屋荘（ふるいわやそう）」15:05ー四十五番札所・岩屋寺15:40～16:40ーやすらぎの宿「でんこ」17:15（泊）
宿 お遍路=6300円、ドライバー=3000円、新しく全体的にいい宿

今朝も朝から雨だった。夕飯時、食堂が寒くてちょっと風邪気味だった。このところ気温が低かった。バスで昨日の最終地まで行き出発。

倉谷・浮船・大込・本成・畝々などの集落を進んで行く。標高が約500mになり寒々しい集落が続くが、果たして人が住んでいるのか、いないのか判然としなかった。

道端の一軒家に来て破れた障子を何げなく見たら、老人が身じろぎもせず私たちに



ジッと見ていて「ギクッ」とした。

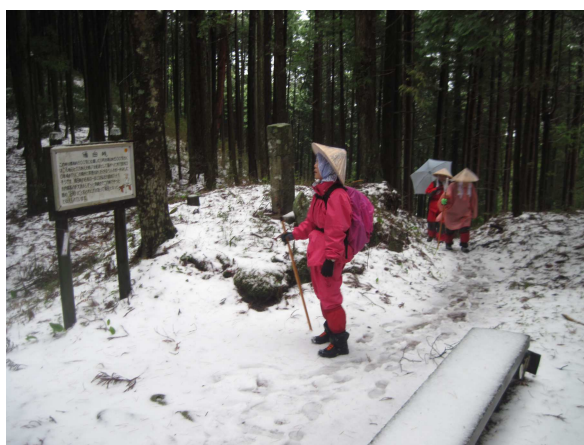
本成辺りでとうとう雨は曇から雪に変わり、畑が白くなって来た。四国も高知県は四国山地の東側で冬の風は遮られ温かい。しかし、愛媛は山脈がないので結構寒気が入る。天気予報の温度を見ると3～4度違うことがハッキリしている。

日本列島は全体的に寒気の影響で低温傾向が続いている。雪はその影響だろう。下坂場峠の標高は570m。御殿場・永塚位の標高だから領ける。

一旦、宮成集落に出て標高約800mの鴉田峠に上り返すと、雪は足首まで潜り靴



下坂場峠 標高570m



鴉田峠
標高800m



はグチャグチャだった。

峠下の休憩場で、やっと出た「ツクシ」が雪に埋もれていた。峠を下りて行くとTさんが「私、この前ここに来た」という。ジェジェジェ。(もう、古いか?)一週間前くらい旦那さんの兄弟の葬儀で来四し、茶毘をすぐ近くで行ったという。いや～、世の中狭いものです。これも何かのご縁です。

それでも久万高原町(くまこうげん)に下りたら雪は止んでいた。時間は10:30だが、大寶寺に入ると昼食時間が半端になるので先に昼食にした。

「みどり」という店だが、本来今日は休みらしかった。でも、ドライバーの口利きでやってくれた。冷え切った体をまず熱燗で温めて、温かいソバをいただいた。靴をストーブで乾かしていたら紐が溶けてしまった。

寺入り口の売店でTさんがグッズを購入。そしたら店のオバさんがお茶と一度食べたら止まらない「やいとまんじゅう」という、ヨモギ饅頭をお接待してくれた。昼食後だったが美味しかった。

四十四番札所・大寶寺でお勤めを済ませ裏の山道を通ってR12に出た。ふるさと村の先から再び山道に入る。牧歌的ないいところだった。Wさんが川にはまったりしたが……。抜けると周りは奇岩・怪岩・巨岩がニョキニョキ林立していた。

看板によると何でも4000年前の礫岩という……。地名を「古岩屋(ふるいわや)」と呼んでいた。国民宿舎も「古岩屋荘」。Tさんは石鎚山登山時泊まったそう。我々もそうしかかったが、ま、登山は時間が掛かる。

四十五番札所・岩屋寺は先にあった。ただ、寺は標高670mにあるので、標高440mから上らなければならない。途中に行き倒れのお遍路さんの墓があるという。

上って行くと上から参拝を済ませたご婦人が6~7名「ご詠歌」を唱えながら下って来た。

寺は今まで訪ねた中で印象的な寺だった。本堂の脇の岩山に長い梯子が掛けてあった。



四十五番札所
岩屋寺

昔、この上に「法華仙人堂」あり、そこに上るためだったようだ。高さ6～7mくらいか。梯子の一段が広く太いのでかなり上り辛く、ちょっと怖かった。後から来た外人さんも上った。

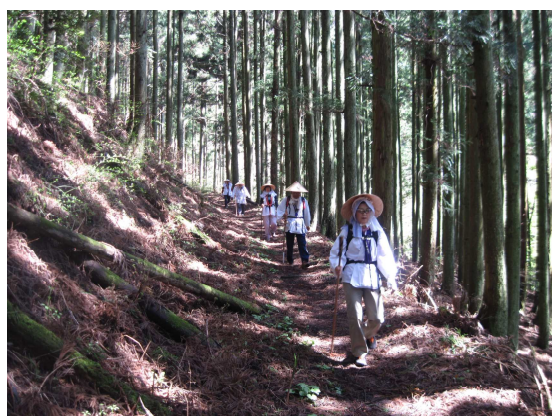
寺を下って行くと入り口近くの民家で風呂を焚いていた。ところが驚いたことに、オバさんが薪で焚いていたのだ。現在この光景は都市部では絶対見られないものだ。それだけ薪が豊富ということだろうか。

下った駐車場で今日は終了。皆さん、今日は大奮闘でした。ご苦労様でした。

第4日目 04月08日(月・晴) 通算歩行日数=31日 距離=約30Km(下り長い)
バス「でんこ」発7:00-お遍路開始7:20-昼食「豚太郎」11:30
~12:10-午後開始12:40-三坂峠13:15-坂本屋14:10-網
掛石14:40-四十六番札所・浄瑠璃寺15:45-四十七番札所・八坂寺1
6:00~30-「長珍屋」16:45(泊)
宿 「長珍屋」=お遍路・ドライバー 6825円 対応はまあまあ

バスで岩屋寺に行き昨日来た道に戻る。今日は天気が良かった。昨日沢にはまったWさん、今日は慎重に行く。先で反対側から来た変なオジさんに会った。R12から峠御堂トンネル手前の昔の遍路道は味わいがあった。トンネルは手押しの照明があった。例のタスキ箱はあったが、何故かタスキは無かった。

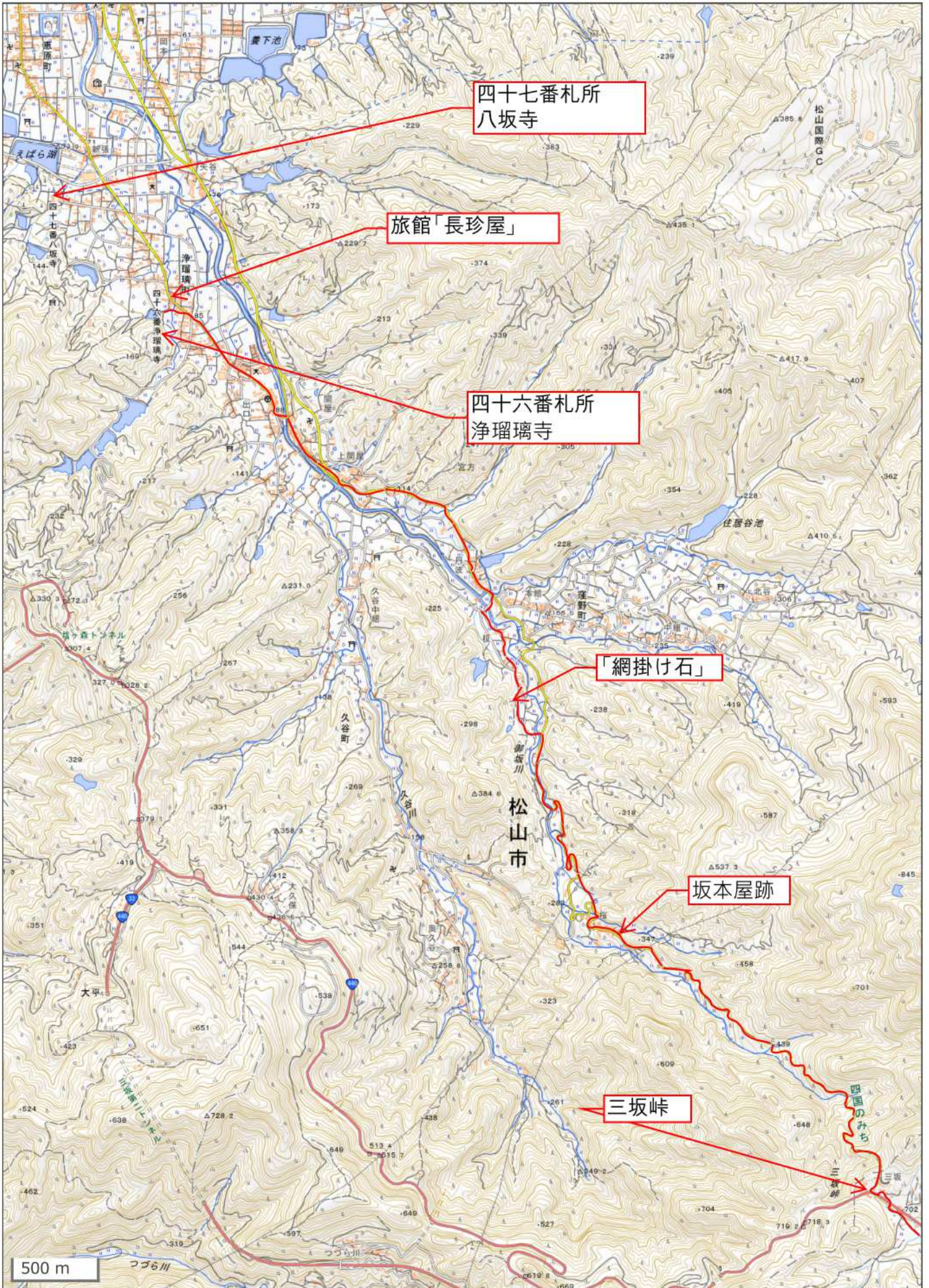
久万町を右折してR33を三坂峠に向かう。峠までダラダラと標高差約200m上っている。ただ、今日はイイ天気で薫風がそよぎ、山桜が満開だった。民家の軒下には薪が山積みしてあった。ここも風呂が薪釜だろうか。岩屋寺から結構時間が掛かり、早くも昼食時間となった。バスで店を探し、中華店「豚太郎」に入った。標高710mの三坂峠を越えると松山市が一望できた。旅の大きな分岐点だった。尾根を東に向かえば、四国最高峰の石鎚山(1982m)にたどり着く。近くにスキー場もある。



三坂峠下り



坂本屋跡





お遍路さんのお墓（遍路墓）
ブラジル移民のお母さん



雪は結構降るようだ。

陽光を一杯浴び感じの良い道をグングン下る。逆打ちの場合、足応えありそう。

昔は高知への最大の難所だった。関東でいえば箱根のようなものだ。更に下ると昭和初期まで賑わっていた遍路宿「坂本屋」が復元されていた。

囲炉裏や竈があって周囲の風景に溶け込んだ癒しの空間を作っていた。尚も下って行くと人家が増え集落っぽくなった。とある家の入口に小さなお墓みたいのがあった。庭先にいたオバさんに挨拶をしたら、それは「ここで行き倒れたお遍路さんの墓」と教えてくれた。

オバさんは、久万高原の方でここは姉の家という。18歳時、ブラジルに渡り久しぶりの里帰りという。先日は三坂峠を往復したそうだ。お元気で・・・と別れた。

下に弘法大師の「網掛け石」があった。大きな岩に無数も網目がある不思議な岩だった。四十六番札所・浄瑠璃寺はすぐ下にあった。入り口向かいに今日の宿「長珍屋」がある。鉄筋の大きな建物だ。

寺は小さい。ご朱印はオバさんだった。時間は16時を回ったが、近くの四十七



四十六番札所・浄瑠璃寺



四十七番札所・八坂寺

「念ずれば 花ひらく」



花祭り

番札所・八坂寺まで足を伸ばす。八坂寺は大きな立派な寺だった。すっかり忘れていたが今日は「花祭り」だった。本堂に花で飾られた綺麗なお釈迦様が祀られ、幟が沢山立っていた。

境内に大きな石碑があった。今回初参加のTさんお気に入りの「村坂真民」の「念ずれば 花ひらく」だった。村坂の生まれは熊本だが、愛媛県で教職に就きその後、近くの砥部町に「たんぽぽ堂」の居を構え、毎日午前1時に起床し近くの重信川で祈りを捧げる日々だったといわれる。

今日はここで終了。バスで浄瑠璃寺に戻り「長珍屋」に入る。宿は大きく立派だった。入り口脇に杖を洗う大きな流しがあり、エレベーターもあった。

風呂は大きい。食事の大広間には祭壇があり、弘法大師をはじめ数々の仏さまが祀ってあった。さしずめ、「お遍路さん専用の宿」だった。ただ、夜は何かゴロンゴロンと変な音がしてイマイチだった。

第5日目 04月09日(火・晴) 通算歩行日数=32日 距離=約23Km

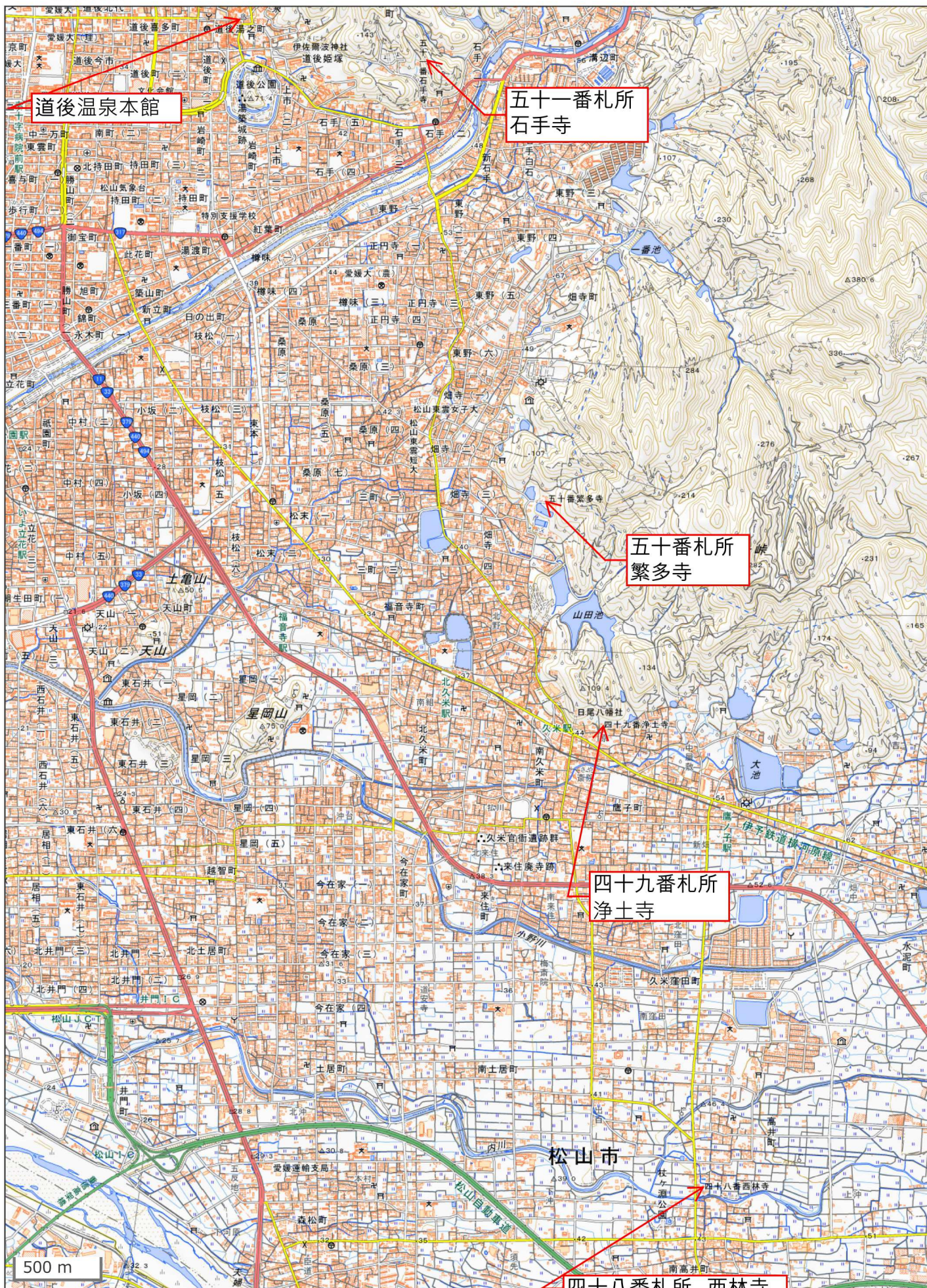
バス宿発6:30-お遍路開始6:50-四十八番札所・西林寺8:00~25
-四十九番札所・浄土寺9:15~40-五十番札所・繁多寺10:05~30
-五十一番札所・石手寺11:10~35-五十二番札所・太山寺16:00
~40-民宿「ヴィラ道後」17:15(泊)

宿 お遍路・ドライバー=6500円、応対はまあまあ

女将の笑顔に見送られバスで八坂寺に行きお遍路開始。今日も天気はいい。R194からR40を北上し、松山自動車道を潜ると四十八番札所・西林寺は近い。

イケメンの一人お遍路さんと交流。四十九番札所・浄土寺は1時間掛からない。途中「熊」という表札を発見。境内には、緑の桜「御衣黄(ぎょいこう)」が咲いていた。先ほどのイケメンさんとまた会ったので記念撮影。

五十番札所・繁多寺も近い。今日は寺が多くて、ご朱印係りの私は忙しい。寺の入



り口の池の畔でオジさんがアイス・キャンデーを売っていた。「おいしい昔のアイス」(200円)だった。帰りにSちゃんが買った。中は黄色だった。今日は気温が高かった。池といえば、辺りはやたら「池」が多い。松山市だけでも697箇所あるという。四国は降水量が少なく全て灌漑用水とのこと。

次の石手寺は近い。仁王門は国宝。その昔、領主河野伊予守息利(やすとし)の長男息方(やすかた)は、衛門三郎の生まれ変わりといわれ、出生後三歳まで弘法大師筆の「衛門三郎再来」と書かれた小石を左手に握っていたと伝えられ、その小石が寺宝として今も残っているそうだ。境内入り口の店が面白かった。

五十二番札所・太山寺に向う。市内を通過するので楽しみだった。昔の東海バスカラーのチンチン電車が走っていた。道後温泉本館前も通過。明日入るのが楽しみ。辺りは風俗が多く、朝から営業店もあった。その昔、Sちゃんは先生組合の旅行で来て「少し遊んだ」そうである。(笑)先で、先日行き交った変なオジさんにまた会った。何か最近では珍しい弩原色の衣装だから目立つのだ。

途中、JR伊予線を横断したら丁度、急行とおぼしき電車が通過した。ロングノーズの電車で格好良かった。ゴルフ場脇から裏道に行く。畑でオジさん達が奮闘中。道の脇にカゴが置いてありミカンが沢山入っていた。「持って行け」というので、例によってワラワラと頂きました。

裏道を過ぎると一ノ門があった。周りは民家だらけだが、昔は境内だったか?太山寺は大きな寺だった。1305年建立の本堂は国宝で非常に立派だった。参道にある唇を真っ赤にしたお地蔵さまが目に焼き付いた。



・・・大昔、太山寺の麓には、絶世の美女が住んでいたそうだ。その美女をお嫁さんにもらい受けるべく、和気という村の村一番の力自慢の男が名乗りをあげました。

しかし、太山寺の山の反対側、三津からも三津一番の力自慢の男も名乗りをあげました。両者睨み合いのまま、美女にどちらか決めてもらうようになったそうですが、あろう事か、三津の男は強引に美女を連れ去るワケです。

その話を聞いた和気の男は、急いで後を追いかけてます。太山寺の山の山頂で追いつき美



四十八番札所・西林寺



四十九番札所・浄土寺

五十番札所
繁多寺



五十一番札所・石手寺



アイス屋おじさん



J R伊予線



五十二番札所・太山寺（国宝）

女の腕をとり、取り合いになりました。美女を挟み、両腕を力自慢の両者が引っ張る。その結果、美女を引き裂く事態となり、美女は亡くなってしまいました。

何の罪もない美女の菩提を弔うために、太山寺の参道に口紅をつけたお地蔵様が奉られる事となったそうです・・・ネット

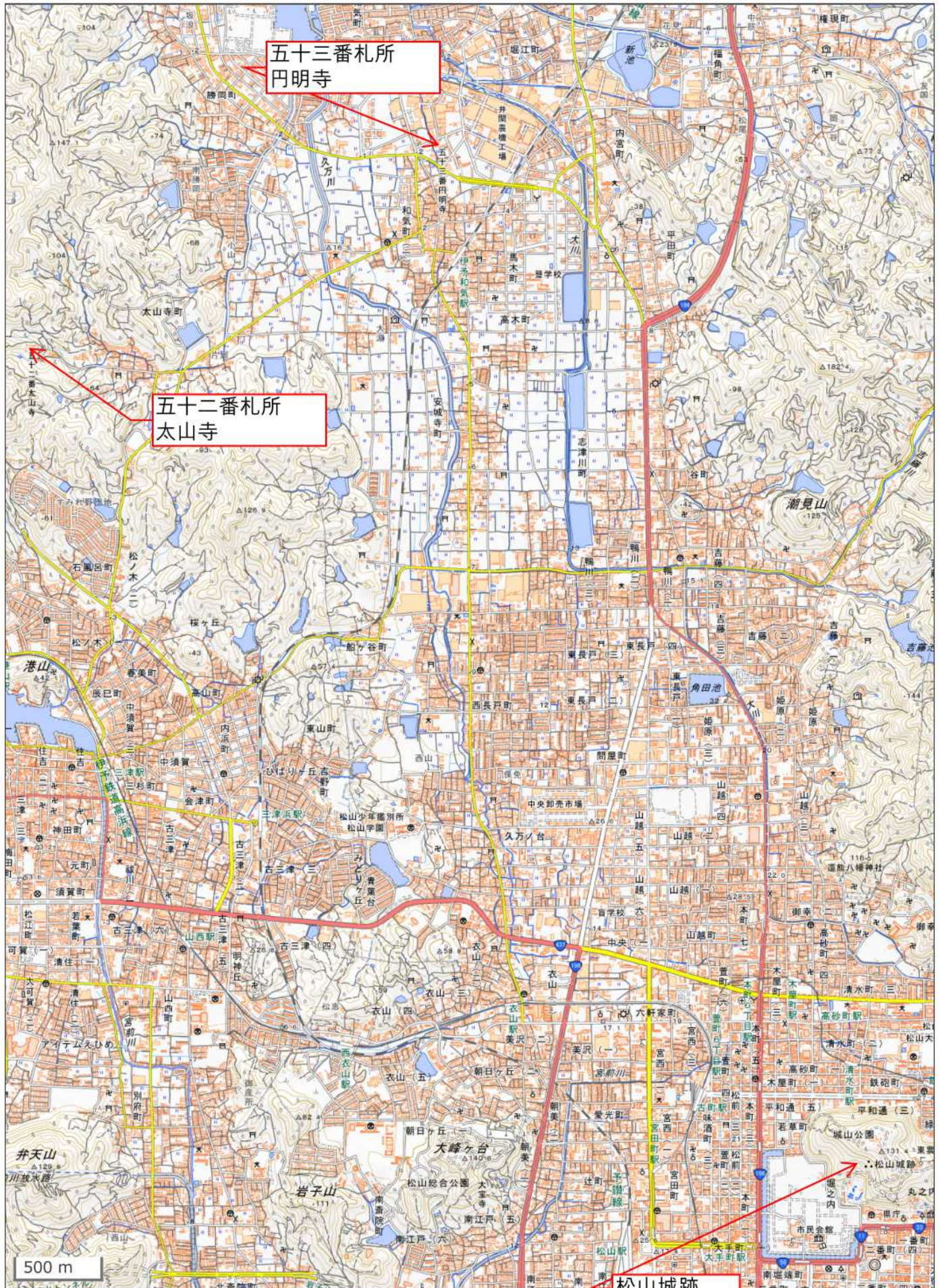
今日はここで終了。バスで「ヴィラ道後」に向かった。

第6日目 04月10日（水・晴） 通算歩行日数=33日 距離=約16Km

バス宿発6：30ーお遍路開始7：10ー五十三番札所・円明寺7：45ー鎌大師11：30ー峠11：50ーバスー昼食ー松山城見学13：45～15：10
ー市内見学ー道後温泉「八千代」17：30（泊）

お遍路最終日。今日も天気は良い。バスで太山寺に向かいお遍路開始。五十三番札所・円明寺は近かった。お勤め後、R196を北上する。久しぶりに海沿いの道で気持ち良かった。隣にJR予讃線が走っている。辺りは伊豆巡礼・富士山ウオーキン





五十三番札所
円明寺

五十二番札所
太山寺

松山城跡

500 m



五十三番札所・円明寺



鎌大師上



松山城

グのOTさんの故郷。確かに表札はOTがあった。

R196は、波妻の鼻を経由している。こちらは長いので鎌大師経由で行く。ちょっと道が分かり難かった。峠で丁度12:00。今回はここで終了。午後は松山市見学。昼食は、ソバ派と寿司派に分かれた。四国でソバを食べるのは難しい。

松山城はなかなか立派な城だった。後はSちゃんとカラクリ時計を見たり、路面電車に乗ったり、道後温泉本館を見学して楽しんだ。

第7日目 04月11日(木・晴) 歩行=なし

バス宿発8:00-松山道徳島道-淡路島-名古屋-静岡-長泉町18:00
ころ

「ド～ン・ド～ン・ド～ン」朝6時、太鼓の音と共に道後温泉本館が開場。朝、余りの寒さにSちゃんと「行くか、行くまいか」迷っていたが結局、出て来た。

温泉は、市営で400円と安い。一階の「神の湯」は、中に2か所ある。左右、バックの壁画が違った。湯は温からず熱からずのいい温泉だった。出た後、2階などを見学。誰もいない個室を勝手に開けたら文句をいわれた。

朝食後、宿に見送られ帰静。今回もいろいろありましたが、無事に終わって何より。ご苦労様でした。感謝・多謝・深謝。合掌。



ゆるキャラ「よしあきくん」
初代城主は「加藤嘉明」



松山城



切り抜き帳

托鉢・・・仏教やジャイナ教を含む古代インド宗教の出家者の修行形態の一つで、信者の家々を巡り、生活に必要な最低限の食糧などを乞う（門付け）街を歩きながら（連行）又は街の辻に立つ（辻立ち）により、信者に功德を積ませる修行。乞食行（こつじきぎょう）、頭陀行（ずだぎょう）、行乞（ぎょうこつ）ともいう。

役の小角・・・（えんのおづぬ / おづの / おつの、舒明天皇6年（634年）伝～大宝元年6月7日（701年7月16日）伝）は、飛鳥時代の呪術者。役行者（えんのぎょうじゃ）、役優婆塞（えんのうばそく）といった呼び名でも広く知られている。姓は君。日本独自の山岳信仰である修験道の開祖とされている。実在の人物だが、伝えられる人物像は後世の伝説によるところが大きい。前鬼と後鬼を弟子にしたといわれる。天河大弁財天社や大峯山龍泉寺など多くの修験道の霊場に、役行者を開祖としていたり、修行の地としたという伝承がある。

ていれぎ・・・和名をオオバタネツケバナといい、愛媛県松山地方を中心とした方言での名称で、日本各地の低山、原野の水湿地や溝などに生える多年生草です。香りもよく、ピリッとした辛みがあるので、松山地方では古くから刺身のつまなどに珍重される。しかし、環境の変化により松山地方では、生息地が激減し、昭和37年（1962年）11月に松山市天然記念物に指定された。

一遍上人（捨聖）・・・南無阿弥陀仏とただ一度（一遍）唱えるだけで、極楽に往生すると説いた鎌倉仏教最後の祖師。族縁はすべて捨て去り、おどり念仏で全国をまわり、女人非人をも救済した希代の生涯を送った。

一遍は全国を旅した。ただ1人で念仏を勧めることを念仏勧進という。また、この仏法を説いて旅をすることを遊行という。念仏勧進に当たって「南無阿弥陀仏決定往生六十万人」と印刷した大人の人指し指大の紙のお札を配った。

念仏勧進に必要な仏法の所持物以外は一物も持たなかったのが、捨聖と言われるようになったのである。こうして、南は九州の大隅から北は奥州江刺に至るまで念仏札を配って歩いた。

それは多く下駄ばきの遊行であった。人は胸に吸い込んだ空気を大きく吐き出すと、次はまた空気を吸い込む。一遍は一切を捨てることで、その空となった部分を念仏勧進で満たそうとしたのである。

ご詠歌・・・仏教の教えを五・七・五・七・七の和歌と成し、旋律＝曲に乗せて唱えるもの。日本仏教において平安時代より伝わる宗教的伝統芸能の一つである。五七調あるいは、七五調の詞に曲をつけたものを「和讃」（わさん）と呼び、広い意味では両者を併せて「ご詠歌」として扱う。

花まつり・・・灌仏会（かんぶつえ）は、釈迦の誕生を祝う仏教行事である。日本では原則

として毎年4月8日に行われ、一般的には花祭・花祭り・花まつり（はなまつり）と呼ばれている。釈迦（ゴータマ・シッタッタ）が旧暦4月8日に生誕した伝承に基づいている。降誕会（ごうたんえ）、仏生会（ぶっしょうえ）、浴仏会（よくぶつえ）、龍華会（りゅうげえ）、花会式（はなえしき）の別名もある。

伊予鉄道・・・株式会社伊予鉄グループの主要子会社であり事業会社である。愛媛県松山市に本社を置き、鉄道・軌道事業を行っている。現在の法人は2018年（平成30年）4月1日に伊予鉄グループの持株会社移行に伴い同社（旧・伊予鉄道）の会社分割により発足したもので、旧・伊予鉄道（現・伊予鉄グループ）は1887年（明治20年）に創立された、民営鉄道としては日本で2番目の歴史を持つ老舗企業である。

松山城・・・愛媛県松山市にあった日本の城。別名 金亀城（きんきじょう）、勝山城（かつやまじょう）。各地の松山城と区別するため「伊予松山城」と呼ばれることもあるが、一般的に「松山城」は本城を指すことが多い。たびたび放火（不審火）や失火により往時の建造物を焼失している。

現在は、城跡の主要部分が公園として整備され、大天守（現存12天守の1つ）を含む21棟の現存建造物が国の重要文化財に、城郭遺構が国の史跡に指定されている。そのほか、連立式天守群の小天守以下5棟をはじめとする22棟（塀を含む）が木造で復元されている。また、現存十二天守としては、最も新しい城である。

道後温泉・・・四国・愛媛県松山市（旧国伊予国）に湧出する温泉である。日本三古湯の一つといわれる。その存在は古代から知られ、万葉集巻一にも見える。かつては、この周辺が温泉郡（おんせんぐん）（湯郡）と呼ばれていたが、これはこの温泉にちなむ地名である。夏目漱石の小説「坊ちゃん」（1905年）にも描かれ、愛媛県の代表的な観光地となっている。2007年8月に地域団体商標（地域ブランド）として認定された。



2013/04/10